書評

和田敦彦著『書物の日米関係 リテラシー史に向けて』

榊原理智

書評を私事で始めるのは無粋であるかもしれないが、そもそも蔵書史の専門家でもない私に和田敦彦氏の著作『書物の日米関係』の書評者として白羽の矢が立ったのは、私が本書と関係の深いアメリカの大学出身であるという事情によるものであろう。思えば大学院生時代、私は自分の研究生活のみならず精神生活をも、アメリカの日本語蔵書に支えてもらったのである。しかしそれはまた、これらの蔵書を取り巻く「日本学」という学問領域に自らを適合させることに気を取られるあまり、その中に無自覚に飲み込まれてしまっていた時代の苦い思い出でもある。本書の書評を書くという作業は、回顧的なものであると同時に現在の私の関心に直接切り込む作業となった。

和田敦彦氏の『書物の日米関係』は、二つの点において画期的な書物である。まずは、単なる蔵書史に留まらない、読み手の育成や管理者の誕生、流通の問題等をすべて包含した「リテラシー史」という領域を提唱し、その成果をはっきりと我々の前に示したこと。すなわち、蔵書の移動を、さまざまな人や制度や言語をめぐるあらゆる政治的・社会的関係が介在する場として生々しく描出したこと。そしてもう一つは、アメリカ合衆国における日本学という学問領域の生成を、図書館の蔵書に注目するという新たな視点から記述したこと。おそらくこれは日本語で書かれたアメリカ合衆国における日本学への、最初の包括的・体系的な歴史化の試みである。これまでもアメリカの日本学への興味は、個別の研究者によって示されたことはあった。しかし、実際にこれだけの規模で、歴史的記述の対象とされたことはなかったといってよい。この書物は、日本という地理的領域以外で発達した、独立した「学」としての「日本学」を、日本語において初めて立ち上げたのである。

本書は、蔵書の蓄積とその整理というインフラ・ストラクチャーを通して「学」の政治性へと迫るというその姿勢において、間違いなく優れた批評性を持っている。それを確信しながらもまた一方で、私はかすかな違和感を感じた。批評性を適正に評価すると同時に、その上で敢えて違和感を言語化してみることを通して、今後の和田氏のプロジェクトの新たな展開におおいに期待していることを私なりに示したい。

序章は我々を一歩一歩丁寧に、このプロジェクトの全体像へ導いてくれる。一図書館職員というよりは、日本に関する「知のコンサルタント」とでもいうべきエージェントの存在、そこに作られる人と情報のネットワーク、そこを通して移動する図書たち。ただ出来事を時間的に並べたりただ大学の蔵書史を羅列するという形をとることなく、組織を横断する人の動きに注目して記述することで、図書の移動が厚みをもって描き出される。

第一章・第二章は、アメリカの大学に日本語図書を置くということが構想すらされなかった二十世紀初頭から一九二〇年代にかけて、居合わせた数名の個人によって個別になされた図書収集が偶然のように、またはある種の必然をもって結び合わされていく過程をたどり、一九三〇年代には政府の後押しにより明確な意図を持って日本語蔵書と呼べるような図書の集まりが作られていくさまを描いている。そしてこうした図書寄贈や日本学振興は単なる学術目的ではなく、「日本の対アジア侵攻政策のなかにはらまれた各国の緊張を、文化の名をもって懐柔してゆく機能をもあわせもっていた」と指摘されている。この戦前の動きは、図書を送り出す側が書物に与えた、物質以上の意味を我々に教えてくれもする。「みずからの歴史の浅い場所に、みずからの民族のつくりだした歴史的文献を置くことで、みずからの歴史そのものもそこに植え付けられるとでも思ったかのように」という記述は、実証的というよりレトリカルだが、戦前と戦後における図書の意味の違いを考える上で重要な示唆となろう。

本書では、すべての書物の動きを政治的・国家的力関係に収斂させるような記述は、注意深く避けられている。全体を通じて「現場で書物を扱う人々の裁量」について多くのページが割かれ、「複数の力と要因によって構成され、変動して」いくさまがわかるように書かれているのである。大文字の歴史には登場しないであろう固有名が散りばめられているのは、そうした現場で書物を扱う人々へのオマージュであると同時に単線的な歴史に回収することを拒否する知的手段であるように思われた。

「リテラシー史」という読み手を考慮にいれた領域の設定がもっとも奏効しているのは、「戦時期日本語教育と日本研究」と題された第三章であろう。送り出し側の思惑の作用が大きかった戦前期に対して、戦時期には受け入れ側の政治的理由が大きく現場を左右する。アメリカの日本学における the first generation（第一世代）と呼ばれる研究者たちのほとんどが戦争の産物であるということは、南北アメリカの研究者の間では常識に属することだが、おそらくここまで詳細に彼らの訓練の種類や彼らの間の関係性について体系的に日本語で記述されたことはなかったと思われる。日本語の読み手の育成が積極的にエリート大学において行われ、その帰結として、日本語文化の遺産を相続し、その意味で〈文化資本〉（としては認識されていなかったであろうが）を持っていたはずの日系の移民やその子弟ではなく、白人と通常呼ばれるいわゆる〈正統なアメリカ人〉の日本語話者が増加したという事実は、我々に言語や文化と言われるものの政治的な性質を思い起こさせずにはいない。

第四章と第五章は、占領期における図書の動きを追っているが、ここでもバランスのとれた記述が目をひく。日本語図書が占領者の地に流れたからといってそれは単純に「収奪」と断罪できるものではないし、かといって平和的な「商取引」ともいえない。このバランス感覚は、単に政治的な両極を折衷するための方便ではなく、図書を現場で扱う人々に注目する方法から編み出されてきたものであろう。「歴史学の問題なのか、文学の問題なのか、はたまたアメリカ史、国際関係史における問題なのか、どこにも

明確に位置づけられないような活動」を記述可能にした本書の横断的まなざしをよく表している。

日本語蔵書の分類について扱った第六章をはさんで、「地域研究」という新しい知のあり方と日本語蔵書の関係を扱った第七章・第八章は、おそらくもっとも現在に直結する章である。Area Studies（地域研究）という大きな枠組みの中でアメリカの日本学をとらえ、フーコー＝サイードを援用する形で、「地域研究」のイデオロギー性を鋭く批判したハリー・ハルトゥニアンや酒井直樹らの問題意識とこの第七章はもっとも接近する。カルチュラル・スタディーズの思考を基盤とする彼らは、「日本」という地域にある均質な文化的共同体を夢想することで成立している「日本学」が、資本やアメリカの対外政策と結びつく極めて政治的なものであることを暴くという戦略を時として採る。そして、本書は同様の政治性を、蔵書を追いかけるという一見微細な試みにおいて明確に暴き出している。戦後における「日本学」は、アメリカにとっての日本の重要性が変容した冷戦という大きな流れの中で、イデオロギー性を隠蔽した「地域研究」として新たに生みだされたことを明確にしていると言う点で、「地域研究」批判と親和性を持つ。

しかしその一方で、この書物の記述の仕方には、（おそらくは作者の意図に反して）全体として「地域研究」的な枠組みを強化する要素が含まれてしまっているのではないか。本書の一番の危険は、ディテールに十分注意を払わない読者によって、一種の発展史観的記述として読まれてしまうことである。日本がだんだんと知られるようになり、書物が蓄積されるにつれて日本に関する知識がより完全なものになり、日本語を専門的に読む読者が次第に増え、日本学が次第に整備されてくる…。こうした発展史観が日本語の蔵書の後ろに見ているものは、均質的な日本文化とそれを過不足なく伝える書物であり、これは枠組みとしては「地域研究」と共犯関係にある。「日本語の蔵書」が物質であり、物質として移動し、数量的に記述することのできるものであるからこそ、この発展史観に歯止めをかけるような記述をつくりだすことは困難を極めるだろう。

本書はすでに指摘したように随所に単純な発展史観を許さない記述があるのだが、こうした読者の傾向を助長するものがあるとすれば、ロジカルな記述部分ではなく、むしろレトリカルな部分であろう。例えば、日本語蔵書の整理に携わった人々や、日本語学校の教師を描き出すときの「どこにも属し得ないような曖昧さの中に生きていた」といった語り口は、二つの文化の狭間や異文化間の架け橋といった「地域研究」的クリシェに回収されてしまいかねない危うさを持つ。むろん、彼ら自身がそういう発話をしていたのかもしれない。だがそれは、彼らを取り巻く個別の環境のなかで何かを目指して行われた発話であり、それを記述する作者の語り口が同じでなければならない理由は理論的にはないように思われる。それに関連して瑣末なことながら、「日本人」「日系人」の区別はいかにつけられているのだろうか、とも思った。英語で書かれていれば問題にならなかったこうした部分は、日本語で書かれているがゆえにそれを区別する意識を浮上させる。こう

した呼称がまさに「どこに属するか」という共同体の問題に関わるがゆえにそれを区別する意識の規範を問われる。重箱の隅をつつくような、と言われてしまえばそれまでだが、表象の力学は細部に宿る。非常に困難な、綱渡り的記述が要求されるコンタクト・ゾーンが対象となっているだけに、少し気になった違和感であった。

（二〇〇七年二月　新曜社　A5判　四〇六頁　税込四九三五円）

新刊紹介

南明日香著

『永井荷風のニューヨーク・パリ・東京　造景の言葉』

新版『荷風全集』（岩波書店　一九九二～五年）の編纂にも携わった著者の、古くは八〇年代からのテクスト論を集成した大著。「テクスト生成の現場にたって、いかにどのような言葉でイメージ豊かな空間を創造していったかを辿ろうとする」という文学空間の生成論的作業は、言語と文化を横断しつつ「次なる作風、次なる時空間」を追いもとめテクストを生産する機能としての作者・荷風像を照らし出す。

だから、ふつう物語の時空間と言うときわたしたちはミハイル・バフチンの、イデオロギーの歴史に基礎づけられた時間像・空間像を思い浮かべるのに反して、ここではあくまでそれが作者に体感され翻訳される過程に焦点を当てており、荷風の文体史論的な評伝と言うこともできる。また看過できないのは、カバーはじめ林佳恵の装丁が、驚異的な喚起力で本書の時空間をサポートしていること。

（二〇〇七年六月　翰林書房　A5判　三九八頁　税込三九九〇円）〔田野新一〕

橋詰静子著

『ヒト・モノ・コトバ　明治からの文化誌』

本書は四章から構成されており、それぞれ「誕生」、「家族」、「円熟」、「原郷トポス」というテーマに即して議論が展開される。橋詰氏の考察は、明治期の北村透谷や幸田露伴から、現代の渡辺淳一や干刈あがたという文学者だけにとどまらず、丸善の早矢仕有的・新宿中村屋の相馬黒光などの実業界の人々にまで及び、氏の関心の広さがうかがわれて興味深い。

例えば、「酒仙」幸田露伴と彼が愛した酒と釣りとの関わりは、本書のタイトルにあるように、「ヒト・モノ・コトバ」の分かち難い関係性に迫っていると言えるだろう。また、丸善の早矢仕有的や新宿中村屋の相馬愛蔵・黒光などへの考察からは、彼らの信念に裏打ちされた独創性が、近代の文化を生み出したことがよくわかる。

明治期から現代に至るまでの小説や批評、あるいは丸善や中村屋のような事業が、「モノ」や「コトバ」、それらを取り巻く多くの「ヒト」と互いに響き合う光景がありありと見えてくる一冊だ。

（二〇〇七年一二月　三弥井書店　四六判　二六八頁　税込二一〇〇円）〔西田将哉〕